

第7回ヤクシカ・ワーキンググループの議事概要（案）

1. 全般的な捕獲数や機関別の計画等について

- ・ 平成24年度に4500頭捕獲した結果、農業被害が減少したことは、世界自然遺産地域内での捕獲が進んでいない等の課題があるものの屋久島全体のシカの個体数管理としては、一つの成果と言える。
- ・ 国有林内での捕獲数は、職員実行で捕獲するには限界にきているので、猟友会や町との協力体制を構築し、国有林内で捕獲を進める環境をつくる必要がある。特に、標高700m位までのところの対処を急ぐ必要がある。
- ・ 屋久島町は、今後3年間は年間4,000頭の捕獲を予定しているが、4年後以降も毎年2,000頭程度捕獲する必要がある。
- ・ 林業被害がゼロとなっているが、実際には被害が見られる箇所もあるので、被害の把握に努めること。

2. 生息数の推定について

- ・ 生息密度推定のモニタリングは、確実な手法が確立してないため誤差が生じるのはしかたないが、継続的に調査することで傾向が分かるので、環境省、林野庁、鹿児島県で連携を取って共通認識を持ちながら進めていくこと。
- ・ 今後のシミュレーションの精度向上及び低山域での密度の変化の要因を解明するため、中央部から低地へ移動するシカの実態を把握する必要がある。

3. 捕獲場所や地域別の捕獲体制等について

- ・ DNAデータの研究成果により、地域ごとにDNAに違いが見られたことはヤクシカの定着性の強さを示唆しており、個体数管理は地域単位で実施できる可能性がある。また、個体数管理を進めるためには、捕獲した個体の位置情報の精度を高める工夫が必要である。
- ・ 標高700m以上の高標高域では、捕獲圧がないため警戒心の低い個体が多いことから、目標を決めて専門的な捕獲技術者集団により短期間に着実に進めていくことを検討する必要がある。なお、高標高域で捕獲する場合は、里地でも捕獲数を減らさないことが重要であり、里地では猟友会に捕獲してもらうなど、捕獲者の役割分担が必要である。
- ・ 個体数管理の方法としては、低標高地と隣接する700m位までの管理をここ数年で見通しを立て、それから中央部について取り組んでいくこと。

4. 生態系管理の目標及び希少種について

- ・ 生態系管理は、流域等の生態学的な組み立てを考える地域区分をベースとして、降水量という環境区分、奥岳・前岳等の上下区分、特に標高700mを境に天然スギの有無等により動植物の組成が違ってくることを考慮して、目標を設定することが必要である。
- ・ 森林生態系の項目が植物だけに限られているが、生物多様性という観点も加味し、昆虫等を含む必要がある。また、天然林の復元を評価する因子として萌芽枝モニタリング以外に、シカの嗜好・不嗜好植物の増減や林分の発達段階等の観点も含めて検討していくことが必要である。
- ・ 生態系管理の目標は、WGで検討したものを科学委員会に上げていくことになるが、世界自然遺産地域の管理という観点から見れば、シカの管理を順応的に行うことを目的とした生態系管理の目標だけでなく、もう少し理想的な遺産地域の目標に向かっていく必要があることを認識しておくこと。